



特産果樹生産情報第7号
(最終号)

平成27年10月9日発表
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

**収穫後は、園地の清掃と雪害防止対策等の徹底を！
核果類は、休眠期のコスカシバ防除の徹底を!!**

I 要 約

- 収穫後は、園地の清掃を行い、酸性土壌の改良や野ネズミの被害防止対策及び雪害防止対策を徹底する。
- おうとう、ももなどの核果類は、休眠期のコスカシバ防除を徹底する。

II 生産情報

1 生育概況

露地ぶどうのスチューベンの収穫始めは、鶴田町（県生育観測ほ）で平年より12日早い9月17日、弘前市（県生育観測ほ）で平年より8日早い9月24日であった。

西洋なしのゼネラル・レクラークの収穫始めは、南部町（県生育観測ほ）で平年より4日早い9月14日であった。

2 今後の重点作業

(1) 各樹種共通

ア 施肥（基肥）

ぶどう、おうとう、もも、うめ・あんずの施肥（基肥）が終わっていない園地では、下表を目安に施肥する。施肥量は、各樹種とも土壌条件や樹勢に合わせて加減する。

樹種	施肥時期	標準施肥量(成木・10 a 当たり kg)			施肥割合 (全量に対して)
		窒素	リン酸	カリ	
ぶどう	10月上～中旬	15	10	10	60～80%
おうとう	10月中旬	15	6	12	80%
もも	10月上旬	14	6	10	80%
うめ あんず	10月上旬	14	6	10	80%

イ 園地の清掃

病虫害は落葉や落果で越冬して翌年の発生につながるものが多い。今年、病虫害の発生が多かった園地では、越冬菌等の密度を低下させるために、落葉や落果を集めて土中に埋めるなど処分する。特におうとうの灰星病のミイラ果は見つけ次第摘み取って、園地外で処分する。

ウ 土壌改良

(ア) 有機物及び石灰質肥料の施用

土壌が酸性化すると、生育、収量、品質などに悪影響を及ぼすので、あらかじめ土壌診断を行い、自園の状況を把握する。

(分析の依頼先：JA全農あおもり土壌分析センターか最寄りのJA等)

各樹種の改良目標値は、ぶどうではpH(H₂O) 6.0～6.5、なし、おうとう、ももではpH(H₂O) 5.5～6.0である。

有機物や石灰質肥料を施用した後は、5cm程度の深さまで軽く耕起する。

なお、初めて耕起する園地や近年耕起していない園地では、断根による悪影響を避けるため、晩秋に行う。

(イ) 排水対策

耐湿性は樹種で異なり、おうとう、ももは特に湿害を受けやすい。

一般に地下水位の高い園地では、地下水位が概ね100cm以下になるように

暗きよ等の排水対策を実施する。

エ 苗木の植え付け

老齡樹や障害樹、欠木の多い園地では、若返り対策を進める。

植え付けは、津軽地方では多雪、県南地方では土壤凍結による苗木への影響が大きいことから、春植えが望ましい。春植えは4月中旬頃までに行う。

排水不良地では、植え穴に水が集まり湿害を受けやすいので、排水対策を行ってから植え付ける。

オ 野ネズミ対策

餌となる果実や作物の残さなどを片づけて園内を清掃し、草生、敷わら等をしている場合は、幹の周囲を清耕にして、野ネズミが巣を作るのを防ぐ。

特に、苗木や若木は被害が多いので、晩秋に地上1mの高さまで（積雪の多い所ではさらに上まで）、肥料などの空袋や合成樹脂のプロテクターなどの被覆材料を巻き付けるなどして食害を防止する。おうとうでは樹冠下に忌避剤（フジワン粒剤）を散布して食害を防止する。

また、果樹園で使用できる殺そ剤を使用し、野ネズミの密度低下に努める。殺そ剤以外では、生け捕りワナやバネのついた弾きワナを園地に仕掛けて捕殺する。石油缶を利用する場合は、上面に10cm程度の穴を開けた石油缶を地上5cmくらい出るようにして土中に埋め、缶の中に餌を入れ、缶の上にわらを敷いて雨水が中に入らないように屋根をかけておく。

なお、忌避剤や殺そ剤の使用に当たっては、農薬の使用基準を遵守する。

カ 雪害防止対策

（ア）根雪前の対策

苗木では支柱を立てて、縄などで2～3か所結束する。多雪地帯では雪害を受けやすいので、特に結束もれのないように注意する。

成木では、雪害を受けそうな枝には、支柱を入れる。また、空洞や裂開の生じている樹には、かすがいあるいはボルトを用いて補強する。

不要な枝を大枝単位で剪去する。

（イ）積雪期間中の対策

大雪の際は、まだ雪が新しく軽いうちに、樹の雪下ろしを行う。

雪中の枝先は、雪の新しいうちに抜き上げる。

雪に埋もれた下枝は、融雪期に入ったら随時園地を見回り、枝を引き上げる。

融雪促進のため、融雪促進剤を3月上旬～中旬に散布する。

(2) ぶどう

ア 剪定

剪定は落葉後早めに行う。特に多雪地帯では、雪害を受けるおそれがあるので遅れないようにする。

剪定法には、結果母枝を1～2芽残して切る短梢剪定(図1)と5～10芽残して切る長梢剪定(図2・3)の2種類があり、下表のとおり品種ごとに望ましい剪定法を選択する。

晩腐病や黒とう病などの越冬源となる架線の巻きひげ及び被害枝は、必ず除去して処分する。

垣根仕立てにおける品種と望ましい剪定法

剪定方法	品 種
短梢剪定	キャンベル・アーリー
長梢剪定	スチューベン、サニールージュ、シャインマスカット
短梢・長梢剪定	ポートランド、ナイアガラ

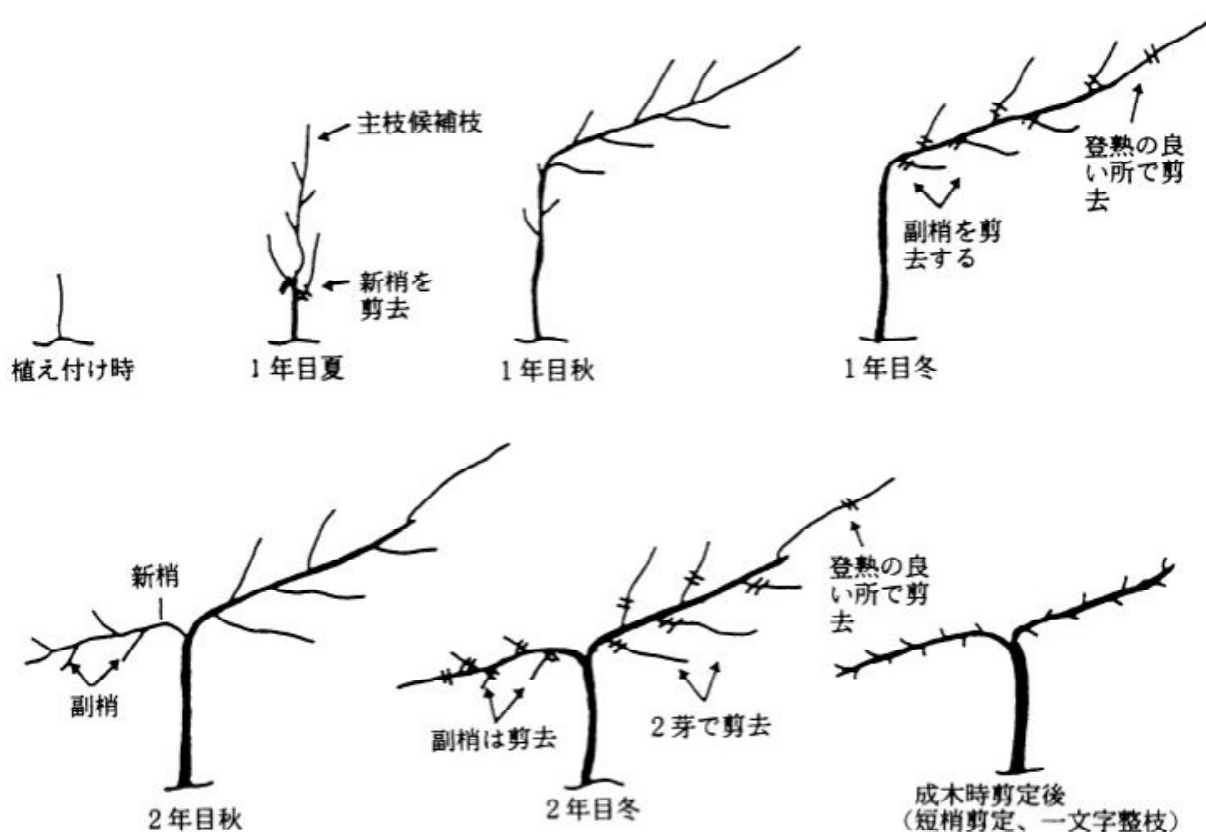


図1 短梢剪定の仕立て方

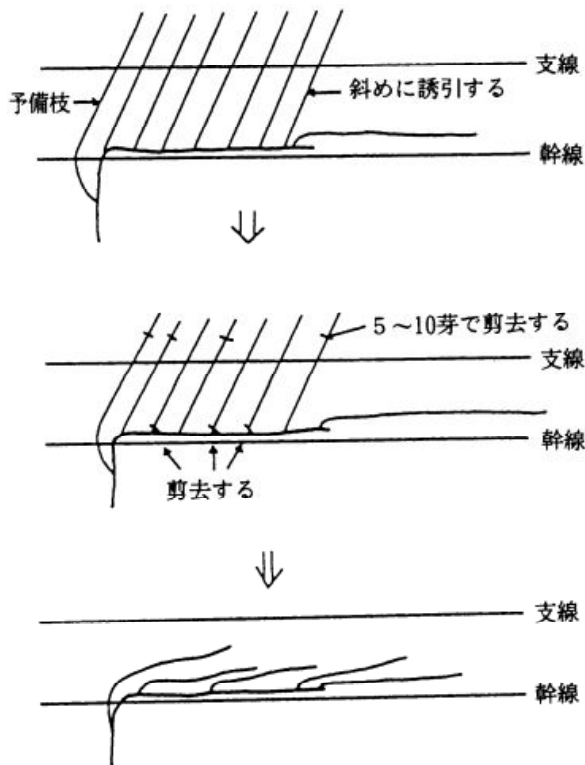


図2 長梢剪定

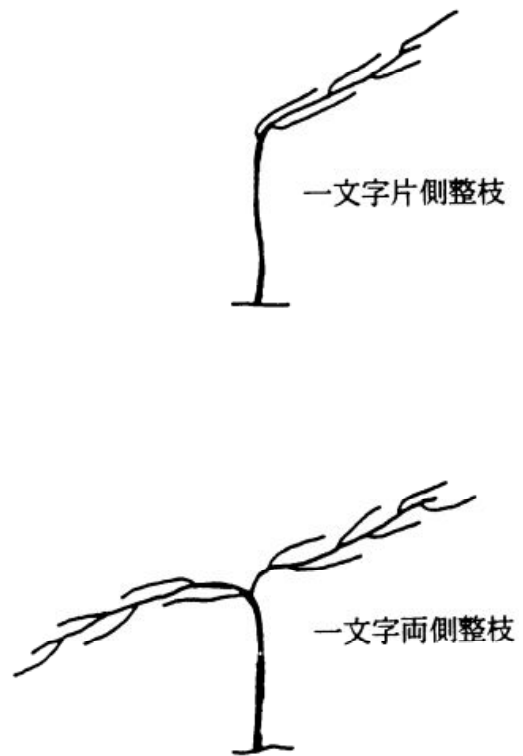


図3 成木時の長梢剪定後の樹姿

イ 眠り病防止対策

眠り病は、スチューベン、ポートランド等で着果過多、結果枝の徒長、遅伸びなどにより樹体の充実が悪いと発生しやすくなる。

発生が懸念される場合は、寒さや乾燥から樹体を保護するために、主幹や主枝部を稲わらやポリエチレンフィルムなどの防寒資材で被覆する。

なお、春遅くまで被覆しておくと発芽が早まり、晩霜害を受けることがあるので、4月に入ったら早めに被覆資材を除去する。

ウ 褐斑病（キャンベル・アーリー）及びべと病（スチューベン）対策

褐斑病及びべと病の越冬源となる被害落葉は集めて処分する。

(3) もものせん孔細菌病対策

病斑を形成している枝の除去を徹底する。

(4) 核果類のコスカシバ対策

被害が見られる園地では、落葉後、下記の薬剤を選択し、枝幹部及び地際部に薬液が十分かかるようにていねいに散布する。

薬剤	樹種	おうとう	もも	うめ・あんず
ガットキラ－乳剤 100倍		○	○	○
ラビキラ－乳剤 200倍		○	○	—

(5) なしのモモシンクイガ対策

モモシンクイガ被害果は、園地内に放置せず、園地外に運び出し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。

園地を見回るなど、農産物の盗難に注意しましょう！

《 農薬使用基準の遵守 》

農薬を使用する場合、ラベル等の記載事項を読み、それぞれの農薬に定められている使用回数、使用時期、使用濃度を厳守し、使用状況を記帳する。使用回数については、含まれる成分によって制限されるので、同一成分が含まれる剤の総使用回数を守る。また、使用者の責任で最新の「農薬登録情報」を確認する。

農薬の使用前には防除器具が洗浄されているかを確認するとともに、使用後は十分洗浄する。

なお、薬剤の年間使用回数は、収穫後から翌年の収穫までの1年間に使用できる回数である。

《 ポジティブリスト制への対応 》

農薬の飛散により、周辺住民及び作物に被害を及ぼすことのないように、散布情報の提供・交換等地域が連携し、農薬飛散低減対策に留意して散布を行う。

《 日本一健康な土づくり強化月間 》

安全・安心な農産物を安定して生産するためには、土づくりが重要です。堆肥の施用や土壌診断などにより、健康な土づくりに取り組みましょう。

農作業は焦らず、急がず、慎重に！～「秋の農作業安全運動」実施中

地域ぐるみで放任園の発生防止と解消に努めましょう！

平成27年特産果樹生産概況の発行は11月末の予定です。

連絡先 : りんご果樹課生産振興グループ
電話番号 : 017-722-1111 代表
 内線5092, 5094
 017-734-9492 直通